

# 特集 中華人民共和国初期における 国家と社会

## 序

河野 正

2021年は中国共産党（以下共産党）成立100周年であり、シンポジウム開催や関連書籍の出版が相次いだ<sup>1</sup>。本特集は流れに掉さすべく、中華人民共和国成立初期、とりわけ1950年代に焦点を当て、国家と社会の関係を問い直すものである。

1950年代史研究は近年個別の研究蓄積が進み、多くの研究成果が発表されつつある。他方、現時点ではそれらの多くが個別の研究の積み重ねにとどまっており、1950年代という時期を包括的に扱う研究は多くない。そこで本特集は広い視点から1950年代中国の実態を明らかにするため、1950年代研究をフィールドとする6名の研究者の論考を収録した。

共産党は、1949年10月の中華人民共和国成立を挟んで、国家としての制度を急速に整備していった。杜崎群傑「1949年以降人民代表会議制度の運用実態に関する考察」は議会制度について注目し、人民代表議会制度について、制度面と地方での実態の両面から考察を行う。ここでは制度成立の背景と、実際の運用における困難を、当時の政治・経済面での状況の中で位置づけて論じている。

周俊「中国共産党の血管—通信システムとしての機要交通に関する歴史的考察」は共産党内の通信制度に注目する。共産党内の通信制度は、地下組織間の通信や各地に分散する革命根拠地間の通信から始まり、内戦末期に共産党政権が現実のものとして見え始めると、全国規模の通信制度が模索されるようになった。党委員会主導・軍主導など様々な方法が模索された後、党委員会・郵便二元体制が確立することとなる。本論考では、この後にも存在した多くの課題浮き彫りにし、21世紀の現在の状況に対する展望を示している。

---

1 シンポジウムとしては日本現代中国学会全国学術大会共通論題「建党100年と「社会主義」中国のゆくえ」やアジア政経学会秋季大会共通論題「中国共産党の100年とアジアの国際関係」などが開催された。書籍としては高橋伸夫『中国共産党の歴史』慶應義塾大学出版会、2021などがある。

角崎信也「中国共産党の農村「国家建設」—黒龍江省における村級人民代表会議制度建設と農村「三反」、1948～53年」は黒龍江省の農村における政権建設の実態について論じる。本論考では制度的アプローチとして人民代表会議制度の整備、運動的アプローチとして整党と三反運動に着目する。共産党はこれらのアプローチを通じ、幹部の官僚主義や命令主義の是正を試みていた。本論考では、その過程で官僚主義や命令主義は是正されず、むしろ助長されていたことを明らかにしている。

隋藝「1950年「婚姻法」の施行から見た中国社会の変容」は1950年の「中華人民共和国婚姻法」の公布および婚姻法貫徹運動の実施過程の詳細を明らかにする。共産党が普及を目指した婚姻法は、大衆の持つ「伝統的」な婚姻観念と異なっており、そのため女性自身によるものを含めて様々な抵抗が見られた。本論考ではその上で事例研究として兵器工場における男女関係をめぐる解雇事件についても分析を行い、婚姻法の普及過程の中で位置づけている。さらに、1950年代の高度に政治化した社会において、大衆動員・政治運動と法律の施行が衝突する様子を浮き彫りにしている。

鄭成「中国建国初期の小中学校における思想政治教育—トレーニングとしての愛国主義教育」は1950年代初期の愛国主義教育の実態とその特徴を考察する。本論考は、教育の第一線で活躍する教員らによる現場報告をもとに、朝鮮戦争勃発後に一気に高まった愛国主義教育がアメリカを敵視するという政治的要請を最優先の課題としていたことを指摘する。その上で、機械的訓練によって学生たちが短期間でアメリカを強く敵視する感情を共有するようになる経緯を明らかにした。本論考はその過程を通じて、現代中国の愛国主義教育の特徴についての分析を試みている。

河野正「中華人民共和国初期農村謠言考序説」は1950年代前半から半ばの河北省を中心に、農村で流布されたデマ（謠言）について考察を行う。この時期の基層社会では様々なデマが見られたが、共産党はそれらを地主や富農などによる破壊行為の一環と位置付けていた。本論考ではデマを発生源ごとに整理し、その多元性を示した。また1950年代初頭から1950年代半ばまでの時期ごとの変容や、地域差についても論じ、北方と南方で共産党政権の安定性に差異が存在する可能性を指摘した。

本特集ではこのように国家と社会という軸を中心に、様々なテーマを設定し、1950年代中国について多様な側面から検討を行った。これからますます増えるであろう人民共和国史研究の礎として本特集が役割を果たすことができれば幸いである。